



「カーネル・サンダースの呪い」と百鬼夜行

はじめに

「一九八五年と近年のちがいが読みとれる、もうひとつの逸話を語りたい。戎橋からのダイビングはあの年にはじまったと、これまで書いてきた。しかし一九八五年のそれは、以後に反復されたたびこみとは、少し様子が違う。あの年だけの光景があった」

これは令和7年(2025)に出版された国際日本文化研究センター所長の井上章著『阪神ファンとダイビング』からの引用です。もう少し続けてみましょう。

「たとえば、身をなげる当人が、その直前に阪神の選手、自分を見立てた点である。」
「番、真弓」、「二番、弘田」……と宣言して、彼らの多くはダイブを執行した」

そして、三番はその年の阪神タイガース優勝の立役者、史上最強の助っ人外国人とうたわれたランディ・バースでした。
「本来なら『三番、バース』を名のる飛び込み手がほしいところだったろう」

しかし、アメリカ人のバースになりすましては抵抗があったのか、なかなか飛び込み手はあらわれず、「ファンの目が、ケンタッキー・フライドチキン道頓堀店の店頭人形へむかう。おなじみのカーネル・サンダース像である」

カーネル・サンダースの呪い

店側は人形をうばいさろうとする阪神ファンに抵抗したらしいですが、「しかし」トラクチ「たちは容赦しなかった。店からカーネル・サンダース像をうばいさり、戎橋までこびこむ。そして、『三番、バース』のかけ声とともに、道頓堀川へなげこんだのである」

こうして、カーネル・サンダース像は道頓堀川の底深く、ヘドロの中へと沈んでいったのでした。

そして、その翌年から阪神タイガースは、17年連続でリーグ優勝を逃してしまい、その急激な弱体化は「川へと沈んだカーネル・サンダースの呪いではないか」とささやかれるようになったのです。これが都市伝説「カーネル・サンダースの呪い」のあらましです。

阪神ファンによる暴動

さて、阪神ファンの道頓堀ダイブは、阪神タイガースがリーグ優勝を果たした昭和60年(1985)10月16日から始まりました。その年の阪神タイガースは好調で、夏ごろから盛り上がったファンたちの狼藉ぶりが目立ちはじめ、優勝でもしたあかつきにはパニックがおこると恐れられていたそうです。

その予想は的中し、優勝決定の晩には駐車している車がひっくり返され、商店の看板が叩き壊されるなど、歓喜でわれを忘れた一部のファンによる暴動がおこり、その異常な加熱ぶりのなかで道頓堀ダイブも執行されたのです。

それにしても、なぜ阪神ファンたちはダイビングの晴れ舞台に戎橋を選んだのでしょうか。

なぜ戎橋で

それについて、井上は次のように述べています。「彼らをひきつけたのは、グリコの看板をはじめとするイルミネーションだったろう。大阪と言えば、テレビなどでは、まず最初に紹介される。街を代表するあの光景が、祝祭気分をファンを歩みよらせたにちがいない。そのスペクタクルが道頓堀川の水面に反射している様子も、彼らをさそったろうか。(中略)じつさい、その後阪神の慶事をいっわうファンは、もっぱらあの橋からとびこんだ。あるいは、橋

のたもとから。ほかのどこから、似たような行為におよんだという話は、あまり聞いたことがない。やはり、あそこはえらばれた場所だったのだらうと思う」

なぜ渋谷で

これと似たようなことが、近年、東京の渋谷でも起こっていました。例年10月31日に恒例となった渋谷ハロウィンです。渋谷スクランブル交差点を中心に、仮装した若者たちが自発的に結集し、一部の不心得者が軽トラックを横転させたり、痴漢や暗嘩、破壊行為を起したことが問題視され、渋谷在住者だけでなく世間からも批判されるようになりました。

彼らが集まった渋谷のスクランブル交差点は、大阪における戎橋と同じく、東京とえば、テレビなどで紹介される名所の一つです。

御堂筋の大道進

ここで話を昭和60年の大阪に戻しましょう。阪神タイガースは、10月16日にリーグ優勝を決めた後、11月2日には西武ライオンズを下し、日本シリーズを制しました。喜びに湧く阪神ファンはキタの梅田にある阪神百貨店前に集まって凱歌を上げた後、御堂筋を南下し始めたのです。

大阪の南北を貫く随一のメインストリート御堂筋で、自然自発的に巻き起こったこのパレードは3.4kmほど南下した後、道頓堀川の手前で60mほど東に折れて、やはり戎橋へとたどり着きました。その数、約2000人にも及んだそうです。当然、この日も川に身を投げる者が続出したのです。

辻と交差点のトポス

阪神ファンにしても、渋谷の若者たちにしても、こうした自発的に集団が形成された場所、民俗学的にも特別なとされています。

阪神ファンが集まった梅田の阪神百貨店前は、六又路の「辻」。渋谷のスクランブル交差点も六又路の「辻」。そして、道頓堀ダイブの戎橋はいうまでもなく「橋」です。これら「辻」と「橋」について、例えば民俗学者の宮田登は「妖怪の出現にあたっては、その場所性というものが、強く影響していることはこれまで指摘されてきた。具体的には三辻とか四辻といった道が交差する地点あるいは橋のた



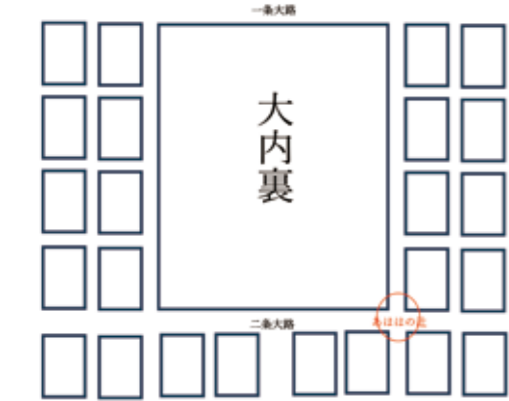
百鬼夜行図(当館職員 上原由子画)

もとであるとか、橋の中間部、坂の頂上とか、坂の中途などに独特な境界がある。それは私たちが無意識のうちに伝えている民間伝承の累積として定着している民俗空間の中に位置づけられている」と述べています。

まあ、阪神ファンや渋谷の若者たちを「妖怪」呼ばわりするつもりはありませんが、何らかの原因でわれを忘れた、つまり社会の規範から逸脱した人々は、テレビなどでよく目にする有名な「辻」や「橋」を、自然と目指して集団をかたちづくるのかもしれない。

百鬼夜行

ところで、国文学者の田中貴子は、「百鬼夜行の見える都市」で、「百鬼夜行が



あははの辻(田中貴子「百鬼夜行の見える都市」(ちくま学芸文庫)掲載図より作成)

△都市Vと切り離すことができない存在」であるとして述べています。田中によれば平安時代において百鬼夜行が目撃される場所は「大内裏に面した場所に集中して」おり、いかにもお化けが出そうな寂しい裏路地や田舎道などではなく、平安京の大内裏を南北に挟む一条大路や二条大路に集中しているのです。

あははの辻

加えて、田中は「もし百鬼夜行のおり来るところ、出発点というようなものを想定するとすれば、二条大路の辻そのものが出発点とは考えられないだろうか。つまり、二条大路に出現する百鬼夜行はどこか遠くから来るのではなく、あははの辻という特定の場所を

拠点として徘徊」するといえます。

「あははの辻」とは、東西に走る二条大路と、南北を貫く東大宮大路が交差する「辻」のことです。名前の由来は明らかではないようですが、「逢う」に「今はの際」などに用いられる「は」が付いてきた、「何もかにも出会う辻」として認識されていたからだと思います。

おわりに

最後に、この百鬼夜行のモデルの一つとおぼしき、平安京での田楽「さわざを」紹介しましょう。嘉保元年(1094)5月のこと。夜中に大騒ぎをしながら京中を練り歩く一団がありました。これは少納言の藤原家俊が10人余りの若い侍を引き連れて、田楽を踊りながら騒いでいたのです。

田楽とは中世に盛んにおこなわれた芸能であり、「ささら」を手に拍子をとりながら舞い狂うのが特徴です。少納言らは、「あるいは裸で、あるいは烏帽子を取り去るという奇異な姿」で踊り狂い、彼らに出会った人は「まるで百鬼夜行のようだ」と思ったといえます。また、彼らはやはり本物の百鬼夜行の出現場所であった二条大路に出て、関白家進物所預の宅に瓦礫を雨のように投げ込んだのでした。まるで昭和60年の阪神ファンや、現代の渋谷の若者たちのようですね。

こうした夜中に乱痴気騒ぎを起こしていた集団をもとに百鬼夜行が想像されたという田中の説は説得力があるように思えます。お祭り気分が浮かれて騒ぎたくなるのは人情ですが、せめて妖怪のモデルとならない程度にはわきまえた方がいいかもしれません。

(文：江口知秀)

道頓堀川から引き揚げられたカーネル・サンダース像 (写真提供:共同通信社)